

8. 高大接続事業

高大接続事業の一環として8月に高校生向け「公開講座」、10月に「高校生ワークショップ」を計画し、茨城大学へ進学し、教師を目指す生徒を対象に事業を展開した。さらに、高校生が大学へ入学したときに、高校と大学の学びの接続が円滑になるよう、大学生と高校生がグループを作り、議論するグループワークを意識的に取り入れ、参加者同士が対話を通して、新たな学びに気づき、自分たちなりに学びを継続できるように課題を設定した。

(1) アドミッションセンターとの連携による「公開講座」

公開講座「教職入門～学ぶとは～」を8月8日に県内の高校生34名を教育学部D棟201に迎え大学の講義を体感してもらえるよう実施した。具体的には前期、教職概論を受講してくれていた学生をアシスタントに、教職概論のさわりを体感してもらいました。学生にとっては、講義で獲得した知識や技能を試す場面になり、大きな学びを得たのではないのでしょうか。その学生の力に誘発され、参加してくれた高校生の目が、徐々に変わっていくのがわかりました。

(2) 本センター主催高大接続事業

10月27日(日)に、「個別最適な学び」と「協働的な学び」はなぜ求められるのかというタイトルで対面とオンラインの歯緒ブリッド方式で、本全学教職センターの主催で行った。10月27日の設定は、参加者は20名と昨年より少なかった。その要因として、本来参加者の主となる2学年が、修学旅行、模擬試験など学校行事と重なるものが多くいた。参加者増を期待するならば、実施時期を検討する必要がある。

今回も、教師を目指す本学学生7名がアシスタントティチャーとして講座に加わった。彼らには、「指導せずに、疑問形で問い直し、彼らに考えさせること」と講座への関わり方を指導した。グループワークで、各班で「個別最適な学びに」について議論し、その議論が既に「協働的な学び」につながることを体感してもらった。そのうえで、自分たちがこれまで当たり前で学んできたことを次の学びへと昇華させるのに有効であることを理解してもらった。大学生たちは、講義で獲得した学びを高校生に試行し、自分たちが獲得した学びが深まったし、高校生も、明日からの学びへのヒントをつかんだはずである。

(3) アンケート結果から

両講座とも終了後にアンケートを行ったが、8割以上の高校生が本学への進学意志が高まったと応えてくれた。また、大学で学ぶことが、自分たちの学びにつながったことがうかがえるような記述回答もあった。なにより、大学生をアシスタントティチャーとして参加させたことは、大学生、高校生双方にとって大きな成果があった。参加した大学生からは、講義で学んだことを試すことができたし、その結果、まだまだ学び続けることが大事であると気付いてくれたようである。

【講座の写真から】

